第三章　神社・寺院

第一節　神社

本節では、町内に所在する神社について紹介する。

九〇五（延喜五）年に編さんが始まり、九二七（延長五）年に完成した『延喜式』の神名帳には、二八六一の神社が記載され、これらの神社は式内社と呼ばれた。この中に「小口神社」の記載があり、町内で現存する神社の中で最も古い記録である。中世における町内の神社に関係した古文書は確認できていないが、一五九七（慶長二）年に中嶋佐兵衛尉が余野地区に所在した神明社と八幡社に対して奉納したと銘文が刻まれている鰐口が残っている（第三編第六章第二節）。

江戸時代に入ると『寛文村々覚書』をはじめ、村絵図などに各集落の神社が記されている。また、江戸時代以降に誕生した新田村についても、集落ごとに神社を創建したため、十七世紀に至り町内の神社所在数が増加した。一八二二（文政五）年に成立した『尾張徇行記』によると、町域の村々に計三四社の存在が記されている。しかしその後、一八九〇年代以降は神社の合祀・廃社などが広く実施され、一九三五（昭和十）年に刊行した『大口村誌』によると、郷社一・村社一八・無格社五の計二四社となった。

祭神別にみると伊勢神宮の天照大神を勧請した神明社が多く、ついで加賀白山を仰ぐ地における白山信仰の白山社、牛頭天王を祭神とする津島社、紀伊熊野に発する熊野社、信州諏訪明神を勧請する諏訪社などがある。

各神社でおこなわれる祭事は、各地区とも元旦祭・夏祭り（天王祭）・秋祭りなどが主となっている。秋田長桜地区に所在する天神社の秋祭り（秋の豊年祭）でおこなわれる湯立神事「湯の花の神事」は、町指定文化財として引き継がれている（第三編第六章第二節）。

戦後は農作業の形態や生活慣習の変化により、祭事のあり方や祭礼日も変化してきた。特に秋祭りは、神社（地域）ごとに祭礼日が異なっていたが、一九〇七（明治四十）年頃から村内全体で十月十五日となり、一九三〇年頃から北部（外坪・河北・余野・小口）では十月二十日、南部（秋田・豊田・大屋敷）では十月二十七日となった。一九五〇年代になると全村で十月二十日に統一され、翌日に小学校の運動会がおこなわれた。一九六〇年代後半になると、十月の第二日曜日もしくは第三日曜日におこなわれるようになった。

社格

明治に入ると、全国の神社・神職が国家の管理下に置かれ、古代以来の神仏習合を解消する神仏分離の令が出された。また、一八七一年一月には社寺領が廃止され、五月には全国の神社が「国家の宗祀（そうし）」となり、神社に関するあらゆる事柄が国家の法制度に組み込まれることとなった。同時に、社格の制度が定められた。官社以外を諸社とし、それを府社・藩社・県社・郷社とした。同年七月の廃藩置県後改めて、府県社・郷社・村社・無格社とした。

一九四六年二月、連合国軍最高司令官総司令部（以下「ＧＨＱ」）の神道指令により神社の国家管理が廃止されると同時に、社格も廃止された。

郷社とは府県社に次ぐ郷邑（きょうゆう）の産土神（うぶすながみ）で、村社よりも崇敬範囲が広く、一地方にわたって崇敬される中心的神社をあてた。町内では秋田長桜地区の天神社が郷社とされた。

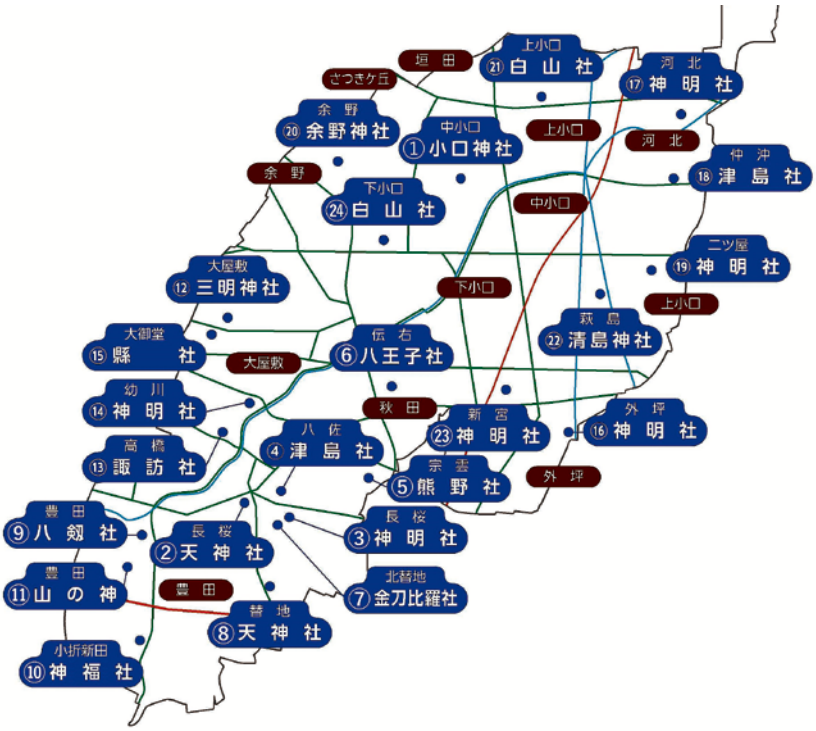
村社は郷社の下、無格社の上で、氏神として仰がれる社を村社とした。一九四五年の制度廃止当時、全国約十一万社のうち村社数は四万四九三四社であった。

無格社は旧神社制度において、最も低い位置にある。一九四五年の制度廃止当時、全国の無格社数は五万九九七社であった。

摂社・末社

神社の境内にある小さな社（境内社）は、摂社と末社に分けられる。その神社の主祭神と関係の深い神を祀（まつ）るのが摂社、それ以外が末社である。末社の中には本社より古い由緒をもつものもあり、その土地にもともと祀られていた地主神である場合が多い。地主神は、元来その土地を守護してきた神のことで、新たに外から大きな神を迎えると末社になっていく場合が多い。

摂社・末社の呼称は戦後も使われ、特に本社との由緒の深い神社には摂社の呼称が用いられている。また、境内地外で祀られている摂社・末社を境外社という。



二〇二三（令和五）年の時点では、町内に二四社の所在が確認でき、その他、記録として過去に存在していたが、現存していない神社が二社ある（3―3―1）。

中小口
①小口神社

秋田
②天神社　③神明社　④津島社　⑤熊野社
⑥八王子社　⑦金刀比羅社　⑧天神社

豊田
⑨八剱社　⑩神福社　⑪山の神

大屋敷
⑫三明神社　⑬諏訪社　⑭神明社　⑮縣社

外坪
⑯神明社

河北
⑰神明社　⑱津島社　⑲神明社

余野
⑳余野神社

上小口
㉑白山社　㉒清島神社

中小口（新宮）
㉓神明社

下小口
㉔白山社

（現存せず）
㉕津島社（豊田）　㉖大口神社（大屋敷）

3-3-1　神社位置図
※社名は、『愛知県神社名鑑』（愛知県神社庁編1992年）による。

一　小口神社

祭神	創建年代	所在地
天照大神ほか	九二七年以前	城屋敷一丁目一五三番地

◆**祭神**　少名毘古那命　天照大御神　豊受姫大神
品陀和気命　息長帯姫命　建速須佐之男命

◆**由緒**

九二七年に完成した『延喜式』神名帳に全国二八六一社が記載されており、これらの神社を式内社という。大口町内では小口神社のみが記載されている。

また、『尾張国本国帳』（平安時代末）の中に「従三位小口天神」とある。

一八八四年の地籍図には「村社　天神社」と書かれている。一九一六（大正五）年五月十五日、字宮前の神明社とその境内社（八幡社・須賀社・神明社）が天神社に合祀された。

◆**旧社格**　村社（平安時代「式内社」）

◆**その他**

七月の夏祭りの際、役員により六部橋の水神碑前で水神祭をおこなう。

神社で保管している「大鈴」、境内の「山柿」が町指定文化財になっている（第三編第六章第二節）。

3-3-2　小口神社境内（2020年撮影）

二　天神社（てんじんしゃ）

祭神	創建年代	所在地
天神七代	不詳	秋田三丁目三九七番地

◆由緒

『寛文村々覚書』長桜村の項に、「社二ヶ所　春日天神社」とあり、『尾張徇行記』には「天王神明社二社（略）、天神春日大明神二社（以下略）」とある。よって、一六〇〇年代半ばには、長桜村に天神社と春日社があり、のちに天王社と神明社ができた。春日社は、一九一九年十一月に天神社に合祀された。天王社は、入鹿八左衛門新田にあってのちに津島社と改称された。

奈良志（ならし）天神

延喜式の神名帳とは別に、諸国で作成された神名帳のうち、平安時代末期に作成した『尾張国内神名帳』には、丹羽郡の項に「奈良志天神」とあるが詳細な場所は記されていない。江戸時代に書かれた『本国神名帳集説』（一七〇七年）、『張州府志』（一七五二年）、そして『尾張徇行記』（一八二二年）は中奈良村（現江南市中奈良）の項で「奈良志天神」との関連を記している。

これに対し、『尾張志』（一八四四年）は、「奈良志天神」を長桜村の天神社としている。もともと天神社の西に位置する奈良子の産土神であったが、長桜村集落の発展により奈良子から長桜村の産土神となったと記されている。

◆境内社

津島社・秋葉社・稲荷社・御嶽社

◆旧社格

郷社

◆その他

境内の樹木「マメナシ」、秋の豊年祭におこなわれる湯立神事は「湯の花の神事」の名称で町指定文化財となっている（第三編第六章第二節）。

3-3-3　天神社境内（2022年撮影）

三　神明社（しんめいしゃ）

祭神	創建年代	所在地
天照大神（あまてらすおおみかみ）	不詳	秋田三丁目六九番地

◆由緒

社伝では、当初鈴木一族十戸の氏神であったが、長桜の氏神となり、一九三三年に拝殿が改築された。本殿は、一七一五（正徳五）年再建の棟札があることから、それ以前の創建となる。また、その昔兵火があり、創建年代が不明との伝承も残されている。

◆境内社　稲荷社

◆旧社格　無格社

3-3-4　神明社（2020年撮影）

四　津島社（つしましゃ）

祭神	創建年代	所在地
須佐之男尊（すさのおのみこと）	不詳	秋田一丁目一〇六番地

◆由緒

江戸時代、入鹿八左衛門新田成立時に創建か。一八七二年七月、天王社から津島社と改称し村社となる。境内北側に自生しているエドヒガン系の桜は、「おおぐち観鋭（かんえつ）桜（ざくら）」をクローン培養する際に、DNA鑑定したものである（第二編第二章第一節）。

◆境内社　稲荷社・秋葉社

◆旧社格　村社

3-3-5　津島社（2021年撮影）

五　熊野社

祭神	創建年代	所在地
伊邪那美命	年不詳	秋田二丁目一三六番地

◆由緒

『寛文村々覚書』によると、宗雲入鹿新田に「一　権現社内三畝歩　前々除」とある。社ではなく「権現」と称し、「社内三畝歩」は敷地が九〇坪、「前々除」は備前検地（尾張国では一六〇八年に実施）より前から免税地であったことを示し、新田開発前は荒れ地であったことがうかがえる。

『尾張徇行記』にも「権現社」とあるが、その由緒について、一六六一（寛文元）年に弥次右衛門が屋敷内に勧請したこと、一六九四（元禄七）年に寺社役所により改めがあり年貢地になったことが記されている。

なお、明治維新の神仏分離令で、「権現社」から熊野社と改称した。天保の村絵図の字中山に「宮　三畝　村除」とあり、一八八四年の地籍図に字中山五十九番地に「村社熊野神社」とある。

社伝では、伊邪那美命・伊邪那岐命・建速須佐之男命・火之迦具土神を守護神とし、寛永年間（一六二四～四四）に小笠原宗雲ほか数名がこの地に入植し、入鹿用水を利用して開拓した。一九一五年祭文殿を建立、一九四〇年に拝殿を改築した。伊勢湾台風の災禍を受け一九六〇年に拝殿を再建し、一九九〇（平成二）年本殿・祭文殿・玉垣を改築した。

なお、『愛知県神社名鑑』では、祭神を伊邪那美命・櫛御気野命と記している。

◆境内社　秋葉社・津島社・稲荷社

◆旧社格　村社

3-3-6　熊野社（2020年撮影）

3-3-7　熊野社境内（2020年撮影）

六　八王子社

祭神	創建年代	所在地
天忍穂耳命ほか	一六二三	伝右一丁目一五四番地一

◆**祭神**

天忍穂耳命　活津日子神　熊野樟日神
多芸津姫神　田心姫神　天穂日命
天津彦根命　市杵島姫命

◆**由緒**

社伝に、一六二三（元和九）年四月、丹羽郡安良村（現江南市安良町）の佐藤伝右衛門らがこの地を開拓し、入鹿伝右衛門新田として新しく村を成立させた際、郷里の八王子社（現江南市安良町八王子地内）を勧請し、守護神として祀ったとされる。

『尾張徇行記』には一六四六（正保三）年勧請と記されている。

◆**境内社**　秋葉社・津島社・神明社

◆**旧社格**　村社

◆**その他**

秋祭りでは、境内で湯立神事がおこなわれ、拝殿内においては、お囃子による巫女舞が披露される。

3-3-8　八王子社（2021年撮影）

3-3-9　八王子社境内（2021年撮影）

七　金刀比羅社（ことひらしゃ）

祭神	創建年代	所在地
大国主命ほか（おおくにぬしのみこと）	不詳	秋田三丁目二三三番地の一

◆**祭神**　大国主命（おおくにぬしのみこと）　大物主命（おおものぬしのみこと）　崇徳天皇（すとくてんのう）

◆**由緒**

『愛知県神社名鑑』に社伝として、境内から西に近接する豊田字笹折（現奈良子三丁目）の土田弥十郎（つちだやじゅうろう）が、寛政年間（一七八九～一八〇〇）に勧請したと記されている。

◆**境内社**　白山社

◆**旧社格**　無格社

3-3-10　金刀比羅社（2022年撮影）

八　天神社（てんじんしゃ）

祭神	創建年代	所在地
菅原道真（すがわらのみちざね）	一八四三	替地二丁目三〇五番地

◆**由緒**

『愛知県神社名鑑』に社伝として、この社の東隣にある替地釈迦（しゃか）堂の開基定隠尼が京都の北野天神の分霊をうけ一八四三（天保十四）年この地に祀り氏神とした。なお、境内にある春日灯籠には「文政八年八月」（一八二五年）と刻まれている。

◆**境内社**

津島社・御鍬社・稲荷社・国府宮・金刀比羅宮

◆**旧社格**　村社

3-3-11　天神社（2021年撮影）

九　八剱社

祭神	創建年代	所在地
天照大神ほか	不詳	堀尾跡一丁目六十番地

◆祭神

天照大神　日本武尊　菊理姫神

◆由緒

鎌倉時代末頃、この地に堀尾氏が移り住み、熱田神宮別宮である八剱宮の御分霊を勧請したのが始まりといわれ、代々熱田神宮へ神饌米を供奉したことから、御供所（ごごしょ＝おんそなえどころ）という地名の由来となった。社造営は、一三八二（永徳二）年と伝えられている。

一五八二（天正十）年、一六一〇年には堀尾吉晴が、本殿再建の寄進をしたとされる。一六三三（寛永十）年、堀尾家は断絶し、翌一六三四年、堀尾但馬が本殿再建の寄進をした後は、氏子により改修・改築がおこなわれた。一九三二年から四年かけて、大規模な改築がおこなわれ、拝殿は曳家され現況の配置となった。

◆境内社

若宮八幡社・津島社・神明社・上知我麻社・大国主社・事代主社・堀尾社

◆旧社格

郷社

◆その他

春の大祭では、境内社の堀尾社で堀尾史蹟顕彰会による堀尾吉晴・金助とその母の顕彰とともに神事をおこない、北側の堀尾跡公園・東側の豊田学共と合わせ「金助桜まつり」を開催している。また、十一月には熱田神宮に新米二〇kgを五袋分と、玉串代を添えて奉納している。

境内は「堀尾氏邸宅跡」という名称の史跡として、「八剱社拝殿」は建造物として町指定文化財となっている（第三編第六章第二節）。

3-3-12　八剱社（2020年撮影）

一〇　神福社

祭神	創建年代	所在地
天照大神ほか	一六〇〇年代中頃	豊田二丁目一三一番地

◆**祭神**

天照大神　須佐之男命　倉稲魂命　保食神
大年神　猿田彦神　大宮比売命

◆**由緒**

江戸時代には、南側に神明社、北側に大福田社と二社に分かれていた。『大口村誌』によると、神明社は小折村（現江南市小折町）から移転して来た社本増左エ門が、小折八龍社（現江南市小折町八竜地内）から別社してきたもので、一六八八年に再建されたといわれている。大福田社は、土田弥十郎が創立したものであり、村人の増加とともに氏神として祀ることとなった。一六五二（慶安五）年に再建されている。

江戸時代、この地区は小折入鹿出新田と呼ばれ、一六三三（寛永十）年の入鹿池完工後、集落が形成される過程で勧請されたと考えられる。『寛文村々覚書』に「社二社」と記述があることから、一六〇〇年代中頃には二社とも創建された。

一九一七年四月、大福田社へ神明社を合併して神福社と改称した。

◆**旧社格**　村社

3-3-13　神福社（2021年撮影）

一一　山の神（やまかみ）

祭神	創建年代	所在地
山の神	不詳	御供所二丁目一四五番地

◆由緒

創建時期は不明であるが、江戸時代の初め、入鹿九郎右衛門新田に住む一族の氏神として祀られた。

◆旧社格　無各社

◆その他

地元では、九郎右衛門にちなみ「クロエ社」と呼ばれている。山の神の信仰は町内でも広く存在しており、各地区の集落内にも「山神」と刻まれた石碑が所在する。入鹿九郎右衛門新田だったこの集落の場合、氏神として祀られたことになる。境内には小規模な本殿の裏（北側）に、「山神」と刻まれた石碑が確認できる。また、一月には左義長がおこなわれている（第三編第四章第二節）。

3-3-14　山の神（2020年撮影）

3-3-15　「山神」と刻まれた石碑（2020年撮影）

一二　三明神社（さんみょうじんじゃ）

祭神	創建年代	所在地
日本武尊（やまとたけるのみこと）ほか	一六七二年か	大御堂一丁目三十番地

◆**祭神**　日本武尊（やまとたけるのみこと）　国狭槌尊（くにさつちのみこと）　大己貴命（おおなむちのみこと）
応神天皇（おうじんてんのう）　伊弉冊尊（いざなみのみこと）

◆**由緒**

『尾張徇行記』には、大縣・真清田・熱田を一社に集めた三明神を一六七二（寛文十二）年正月に勧請し、同時に境内の末社として白山権現社を勧請したとある。

『大口村誌』には、一六六二年正月社殿再建の棟札ありとの記述があるが、『大口町史』ではその棟札は現存せずとし、一六七二年の棟札が記載されている。二〇一八年に本殿回廊修復工事を施工した際、大口町歴史民俗資料館が本殿に収められている棟札を確認したところ、『大口町史』記載のとおり、一六七二年より遡る棟札は確認できなかった。なお、創建年は不詳である。

一九三八年十月二十八日、境内社の八幡社と熊野社を合祀した。

◆**境内社**　白山社・山王社・天神社

◆**旧社格**　村社

◆**その他**

かつて境内社として縣社があったが、一九五三年に近接する大屋敷字県に移した。

3-3-16　三明神社（2021年撮影）

3-3-17　三明神社境内（2021年撮影）

一三　諏訪社

祭神	創建年代	所在地
建御名方命	一五三九	高橋一丁目五十三番地

◆由緒

社伝では、天文年中に信州の士、諏訪三郎時定がこの地に来て暫く居住し、子孫は宮土氏、のち宮地氏を名乗り、一五三九（天文八）年七月二十七日、宮地市左ヱ門・同長蔵が勧請したと伝えられている。一九一九年、社殿を造営した。

『尾張徇行記』にも「諏訪大明神社・・・天文八亥七月勧請ナリ」と記載がある。一九一九年、社殿を造営した。

境内東側に自生しているエドヒガン系の桜は、「おおぐち観鋭桜」をクローン培養する際に、ＤＮＡ鑑定したものである（第二編第二章第一節）。

◆境内社　津島社・稲荷社

◆旧社格　村社

◆その他

愛知県神社庁には諏訪社と届出をしているが、地元では諏訪神社と呼ばれている。

3-3-18　諏訪社（2021年撮影）

3-3-19　諏訪社境内（2021年撮影）

一四　神明社（しんめいしゃ）

祭神	創建年代	所在地
天照大神（あまてらすおおみかみ）ほか	一六〇〇年ごろ	大屋敷二丁目七九番地

◆**祭神**　天照大神（あまてらすおおみかみ）　豊受大神（とようけおおみかみ）

◆**由緒**

『大口村誌』には、丹羽三九郎（にわさんくろう）・三輪九郎兵衛（みわくろうべえ）により一六〇〇年頃に勧請されたと記されている。また、一六八八（貞享五）年五月の棟札があり、それ以前のものは文字不明とある。

『尾張徇行記』には、一六八八年勧請とある。

◆**境内社**　御嶽社

◆**旧社格**　無格社

3-3-20　神明社（2022年撮影）

一五　縣社（あがたしゃ）

祭神	創建年代	所在地
大荒田神（おおあらたのかみ）	一六九九年	大御堂一丁目九十三番地

◆**由緒**

天保期の村絵図を見ると、「縣大明神」が字県に描かれている。『尾張徇行記』には、「大縣大明神」は一六九九年四月に勧請したとある。一八七七年頃、三明神社に合祀されたが、一九五四年に字縣の地に社を再建した。

記録によるとこの年の十一月三日に上棟式がおこなわれ、大屋敷地区内の本郷から神輿（みこし）、新田から献馬、高橋から大鏡餅、地元大御堂からは神輿がそれぞれ奉納された。午後には子ども踊り、夜には獅子（しし）芸が披露された。

3-3-21　縣社（2020年撮影）

一六　神明社（しんめいしゃ）

祭神	創建年代	所在地
天照大神（あまてらすおおみかみ）ほか	不詳	外坪三丁目二番地

◆**祭神**　天照大神（あまてらすおおみかみ）　豊斟渟尊（とよくむぬのみこと）

◆**由緒**

創建は明らかでないが、八五一（仁寿元）年、社殿再建との伝承がある。

『寛文村々覚書』に「社二ヶ所、神明 大明神」とある。『尾張徇行記』には『寛文村々覚書』を引用しつつも「三明神 神明社内東西五十間南北四十七間、此社ハ天正十五年（一五八七）勧請ナリ」とある。

一九二五年の本殿改築時に、境内社のひとつである三大明社（豊斟渟尊）を本社である神明社に合祀した。

◆**境内社**　知立社・国府宮・洲原社・津島社

◆**旧社格**　村社

◆**その他**

笹踊りという行事が、一九〇五年頃までおこなわれていた。祭礼で十歳くらいまでの子どもが笹を持って踊ったので、この名がついたという。名古屋から師匠を迎えて、一週間稽古をし、当日に面白おかしく舞った。この神社の神様は、四つ足を嫌われたとのことで、馬を走らせる代わりに、この踊りがおこなわれた。

安産の神として、妊婦が参拝し玉垣内の砂を持ち帰り、お守りにすれば安産になる。出産後、この砂を返すとともに鷹（たか）の絵を奉納するという風習があった。これを「お砂を借りる」といった。

戦後、社格が廃止になるとGHQの目をおそれて、神社の石柱にモルタルを詰めたという。

3-3-22　神明社（2022年撮影）

秋の大祭

十月二十日の秋の大祭に犬山の上野から巫女（みこ）を連れて来る人があり、氏子の若衆（高等小学校卒業後、徴兵検査まで在住の氏子の男性で組織）が祭りの前から横笛や太鼓の練習を重ねて秋の大祭に祭文殿（拝殿）で巫女舞いを奉納していました。また、年中の各々の神事を若衆で奉仕していました。

このような行事も戦時中に出来なくなり、昭和二十年代には拝殿で踊りやボクシングをやっていましたが、昭和三十四年の伊勢湾台風で拝殿が倒壊し、倒木を材料として拝殿を再建したのちには、宮司による神事のみとなっています。

戦後は外坪区に一六の班があり、一年交替で各班より一人神祭係となり、氏子総代（三年任期）六人と神祭係一六人で年間の神事を奉仕しています。境内の清掃は、氏子全員で五・七・九月の年三回。そのほか、各月、各班交替で奉仕しています。

（昭和四年生まれ）

境内社の祭

知立社・国府宮・津島社は毎年、氏子総代が三河の知立神社、尾張の国府宮と津島神社に代参をします。

①知立神社では神札と清め砂を受けて来て、知立社に納めて氏子の神祭係が御酒・御饌（ごせん）、海・川・山野の物を供えてお祀りをして清め砂は手持の砂で増量して氏子各家に配布する。

②国府宮も上記のように代参をして箱札一体と紙札十三体を受けて①のように祀りをして紙札はビニール袋に入れて笹竹に付け、本郷・松山・巾地区の東西南北に立て郷の一班の屋敷にも一本立てる。

③洲原社も上記のように代参して神札と清め砂を受けていたが、平成の中頃より常駐の宮司が不在になり神札が受けられないようになり中断している。

④津島社は、元外坪字前田、現在の外坪一丁目にあり、毎年夏、津島の天王祭に併せて社の下を流れる境川に綱を張り赤提灯に点火して飾り、社の前で火を焚（た）いて祀りをしていたが、戦争中の燈火管制で出来なくなった。戦後、県道名古屋小口線の拡巾に社の敷地がかかり、外坪神社の境内に移設した。津島神社を代参して箱札を受けて①のようにお祀りをする。

（昭和十五年生まれ）

一七　神明社（しんめいしゃ）

祭神	創建年代	所在地
天照大神（あまてらすおおみかみ）	一六六七年	河北二丁目三二八番地

◆由緒

『寛文村々覚書』の河北村（原文「川北村」）の項には「神明二社」とある。これは、河北二ツ屋地区に所在する神明社も含まれている。

『大口村誌』には、古老の言い伝えとして「当地の墓地の碑を見るに明暦年間（一六五五～五八年）のものがもっとも古いので、おそらくこの神社の創立は、それ以前ではなかったであろうと思われる」とある。

社伝では、一六六七（寛文七）年に三尺の社を建立し、村人の守護神として崇めてきた。一八〇六（文化三）年には社殿・拝殿・鳥居など改築との記録が残されている。さらに一九九二（平成四）年に社殿の改築をした。

3-3-23　神明社（2022年撮影）

◆境内社　津島社・熱田社・池鯉鮒社（ちりうしゃ）

◆旧社格　村社

一八　津島社（つしましゃ）

祭神	創建年代	所在地
須佐之男尊（すさのおのみこと）	不詳	河北三丁目一七二番地二

◆由緒

『寛文村々覚書』に河北村の枝郷として仲沖・二ツ屋が記載されているが、津島社についての記載は『尾張徇行記（じゅんこうき）』にもない。境内の灯籠に刻まれた「文政四（一八二一）」年が、唯一境内で確認できる年代である。

◆旧社格　無格社

◆その他

『大口村誌』によれば、江戸時代末、出雲に出発する神を送り出す神事である九月三十日のお神送り当日、郷中へ一五か一六貫匁ほど（約六〇kg）の大きな石がおちて来たため、それ以後、お神送りをおこなわなくなったといわれている。

虫送りでは、藁（わら）の人形は作らないが、子ども達が鉦（かね）や太鼓を打ち鳴らして集落をまわる。

境内にある灯籠は、次のように刻まれている。

正面「　金毘羅大権現
　　奉　神明宮
　　牛頭天王
　　献　天照皇太神宮
　　秋葉山大権現」
右面「永代常夜燈」
裏面「丹羽郡河北村願主　大竹圓蔵」
左面「辛巳　文政四歳正月謹重吉旦」

3-3-24　津島社（2022年撮影）

3-3-25　津島社灯籠（右：灯籠全体、中：台座正面、左：台座左面）（2022年撮影）

一九　神明社

祭神	創建年代	所在地
天照大神ほか	不詳	二ツ屋一丁目八五番地

◆**祭神**　天照大神　豊受大神

◆**境内社**　津島社・大縣社・琴平社

◆**由緒**

社伝によると、木曽川築堤の前は「舟つなぎの宮」といわれ、「延享二年（一七四五）四月吉日宮地数馬」と記した棟札を所蔵していたとされる。

なお、『寛文村々覚書』には、「神明二社」とあり、旧河北村郷中の神明社も含まれている。少なくとも、覚書が完成した一六七二年以前に創建されたと考えられる。

3-3-26　神明社（2022年撮影）

◆**旧社格**　村社

◆**その他**

町内の神社で、七月におこなわれている「輪くぐり」は、この神社でおこなわれていないが、一九五〇年代中頃まで津島社ゆかりの「提灯まつり」がおこなわれていたという。

二〇　余野神社

祭神	創建年代	所在地
天照大神ほか	不詳	余野一丁目一五三番地

◆**祭神**

天照大神　豊受姫神　誉田別命　息長帯姫命
伊邪那美命　事解男命　保食神　菅原道真
菊理比売命　大名遅命

◆**由緒**

『寛文村々覚書』・『尾張徇行記』余野村の項に、神明・八幡・権現・天神・白山の五社が書かれている。『尾張徇

行記』には、神明社と八幡社は同じ場所にあり、勧請年は不明だが、八幡社は一五九六（文禄五・慶長元）年に、神明社は一五九七年に中嶋佐兵衛尉によって再建され、鰐口が両社に寄進されたとある。また、熊野社（字下流）・白山権現社（のち垣田社）は、一五九七年に中嶋佐兵衛尉が勧請し、天神社（字寺前）は一六一三年に吉田伊右衛門が勧請したことも記されている。ほかに成立年は不詳であるが、諸鑊社（字日高）・愛宕社・須佐之男社が村内に所在した（3—3—29）。

一九〇八（明治四十一）年、熊野社・須佐之男社・諸鑊社が神明社に、天神社とその末社愛宕社が八幡社に合祀され、翌年、垣田社が八幡社に合祀された。一九一一年には、八幡社が境内神社である神明社も合祀した。そして一九一七（大正六）年に神明社と八幡社が合併し、名称を余野神社とした（3—3—30）。

なお、一八四一（天保十二）年に描かれた余野村の村絵図には、神明宮・権現・天神宮・白山宮とある。『尾張徇行記』にある「白山権現社」は、村絵図と一八八四年の地籍図から、のちの垣田社とみられる。

◆**境内社**　秋葉社・津島社

◆**旧社格**　村社

◆**その他**

陶製狛犬（一対）が愛知県指定文化財、鰐口と獅子狛犬（一対）が町指定文化財となっている（第三編第六章第一・二節）。

3-3-27　余野神社（2021年撮影）

3-3-28　余野神社境内（2021年撮影）

3-3-29　明治初期の余野地区内の神社（1884年の地籍図（愛知県公文書館所蔵））

1596（文禄5）年	中島佐兵衛尉が八幡社を再建
1597（慶長2）年	中島佐兵衛尉が神明社を再建、熊野社・白山権現社（垣田社）を勧請
1613（慶長18）年	吉田伊右衛門が天神社を勧請
1908（明治41）年	神明社に熊野社・須佐之男社（成立年不詳）・諸鑊社（成立年不詳）を合祀 八幡社に天神社・愛宕社（成立年不詳）を合祀
1909（明治42）年	八幡社に垣田社を合祀
1911（明治44）年	八幡社に境内神社の神明社を合祀
1917（大正6）年	神明社と八幡社を合併し余野神社と改称する

3-3-30　余野神社成立までの経緯（『余野神社のあゆみ』）

二一　白山社（上小口）

祭神	創建年代	所在地
菊理姫命	不詳	上小口一丁目四九六番地

◆由緒

『寛文村々覚書』小口村の項には、「社五ヶ所　内　神明　白山　八幡　愛宕　大日」とある。「白山」が上小口・下小口どちらの白山社をさしているかは不明である。

『尾張徇行記』小口村の項には、「修験福生院書上ニ薬師堂白山社弁財天社境内」とあり、江戸時代後期には境内に白山社と弁財天社に加え、薬師堂もあったことがわかる。白山社と弁財天社の勧請年も不詳であるが、再建は一六五五（承応四）年としている。

◆境内社　市杵島社・津島社・天神社

◆旧社格　村社

◆その他

昔は左義長をおこなっていたが、ある年その火が拝殿に移り焼失した。その後、祭神が花火・竹などのはぜる音を嫌うとして左義長をおこなわなくなった。一九七八（昭和五十三）年頃より再開されたという。

藁で人形を作り、子ども達が鉦や太鼓を打ち鳴らして集落をまわる虫送りは、町内各地でおこなわれていたが、徐々に姿を消し上小口地区のみ残ったため、町指定文化財となっている（第三編第六章第二節）。

3-3-31　白山社（2020年撮影）

二二　清島神社（きよしまじんじゃ）

祭神	創建年代	所在地
品陀和気命（ほむだわけのみこと）ほか	不詳	萩島一丁目一三二番地

◆**祭神**　豊斟渟尊（とよくむぬのみこと）　品陀和気命（ほむだわけのみこと）　気長帯比売命（おきながたらしひめのみこと）

◆**由緒**

社伝によれば一六六四年四月、この地に三明社が創建された。一八八六年六月の洪水で社殿が流失し、一九〇九年六月二日に小口字清水五十四番地（現在地の西にあたる木津用水右岸）の村社八幡社を三明社へ合祀して清島神社と改称した。『尾張徇行記』では三明社は元禄年中（一六八八～一七〇四）に、八幡社は一五九八年の勧請とある。

◆**境内社**　津島社、須賀社（一八八六年流失）

◆**旧社格**　村社

3-3-32　清島神社（2022年撮影）

二三　神明社（しんめいしゃ）

祭神	創建年代	所在地
天照大神（あまてらすおおみかみ）	不詳	新宮二丁目一四一番地

◆**由緒**

創建は明らかでないが、『尾張志』にて「神明ノ社、二所小口村ニアリセ」と書かれており、その内の一社である。創立年代、由緒いずれも不詳であるが、『大口町史』によると一八三一年、一八四五（弘化四）年、一八六四（元治元）年の棟札に、それぞれ神明社修理と記されている。

◆**境内社**　津島社・池鯉鮒社

◆**旧社格**　旧無格社

3-3-33　神明社（2022年撮影）

二四　白山社（下小口）

祭神	創建年代	所在地
菊理姫命ほか	不詳	下小口一丁目一五四番地

◆**祭神**　菊理姫命　迦具土命

◆**由緒**

『尾張徇行記』小口村の項にある白山社は、上小口地区の白山社のことであり、下小口地区の白山社の記述はない。

一八四一年の小口村の村絵図と一八八四年の地籍図には、現況の位置にあたる旧小口字仁所野六十一番地に白山社が、その北側の同五十五番地に愛宕社が同程度の面積で書かれている。しかし、愛宕社の位置には古墳が所在し、伝承では祠のみ遺存していたといわれている。

『大口村誌』によると、一九〇九年四月二十九日、愛宕社と小口字下五明九十二番地（現下小口四丁目、天神橋の西）の天神社（祭神不詳）を白山社に合祀したとされる。

◆**境内社**　池鯉鮒社

◆**旧社格**　村社

◆**その他**

この社の拝殿及び本殿は古墳の墳丘上に建ち、境内一帯にも古墳が存在するという認識であったため、これら古墳群を白山古墳群として町指定文化財とした。その後、古墳以外にも弥生時代の墓制である方形周溝墓が確認され、境内地を仁所野遺跡として改めて町指定文化財とした（第三編第六章第二節）。

3-3-34　白山社（2021年撮影）

3-3-35　白山社本殿・拝殿（2021年撮影）

二五　津島社（現存せず）

祭神	創建年代	所在地
須佐之男尊	江戸時代か	奈良子三丁目地内

◆由緒

創建時期は不明であるが、江戸時代、入鹿三右衛門新田に住む人々の氏神として祀られたもので水路に挟まれた狭小地に位置していた。

地元住民の話では、現南保育園の西方五〇mあたりに小さな祠があったが神社という認識はなく、一九六〇年代に土地改良事業で整理されたという。

◆旧社格　無各社

二六　大口神社（一九五二～二〇〇八年）

◆所在地　丸一丁目地内（現大口中学校校庭）

◆概要

一九五二（昭和二十七）年に建立され、西南戦争からアジア・太平洋戦争までの戦没者が祭神として祀られた。毎年十一月には「みたま祭」がおこなわれていた。

二〇〇八年、大口中学校と大口北部中学校の統合により、新しい中学校の敷地を再整備するにあたり、学校の西側から東側に場所を移し、平和記念公園として姿を変えた。

◆その他

建立年月日は、一九五二年八月二十二日とある。

このほかの記録によると、竣工式は一九五二年十月二十五日午後一時からおこなわれ、余興もたくさんあり、大変な賑わいであったと記されている。

3-3-36　大口神社（1982年頃）

3-3-37　平和記念公園（2020年撮影）

第二節　寺院

朝鮮半島から六世紀中頃に仏教が伝えられた後、八世紀には国分寺をはじめ、全国各地に伽藍（がらん）を整えた寺院が建立された。大口町域において、この時期に創建された寺院は確認できておらず、平安時代末以降に創始された宗派の寺院が現在も存続している。創建時期は寺伝のため確証は得られないが、全て十三世紀以降であり、十五世紀から十七世紀が多い。

宗派別にみると、曹洞宗及び臨済宗が現存していない寺院も含め一一か寺所在しており、その多さが目立つ（3―3―38）。江戸時代には伽藍を備えていない小規模の寺院が宗派関係なく創建されたが、昭和末から平成の間に無住となり、寺院が整理される、もしくは地元住民によりお堂を維持されるなどの状況となっている。

本節では、各地区に所在する寺院について、昭和以降に廃寺となってしまったものを含め記載する。

地域の寺の解体　苦しみともなった

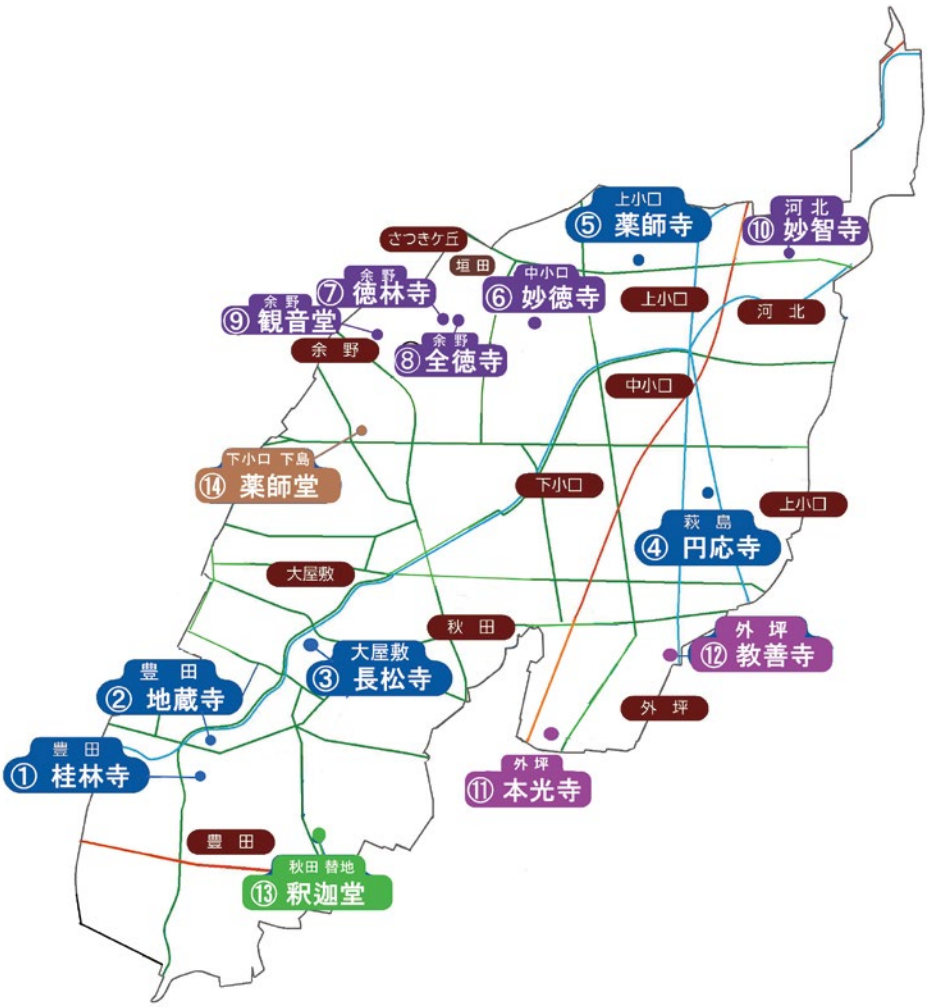
私の住む河北地区で、本堂を解体することになりました。住職が七年前からおらず、管理者不在が続き、老朽化で建物の安全確保が困難になったためです。

解体工事に先立ち行われた儀式に立ち会いました。親寺の住職が「今日のこの日で、全て水に流しましょう」と。解体への苦労や苦しみを端的に表しています。

解体に至るまで約五年の歳月を要しました。住民への説明、解体にかかる費用の捻出、寺の遺品の処分、後世へ伝承する方法、加えて存続か解体か、我々地区の代表と親寺との激論がありました。二二〇年余の歴史あるこのお寺は、地域の礎でした。境内で盆踊りに興じ、映写会・葬儀など住民との関わりがありました。それらが消えることへの寂しさを禁じ得ません。無念です。

全国には七万七千余の寺院があり、常駐の住職のいない無住寺は約二割あるそうです。寺の維持問題は、他の地域も抱えている難問です。答えは一つではありませんが、問題を直視し、話し合うことが解決への第一歩だと考えます。

（昭和二十二年生まれ）



宗　派	寺院（所在地）	無住の寺	現存せず
曹 洞 宗	①桂林寺（豊田）、②地蔵寺（豊田）、③長松寺（大屋敷）、④円応寺（萩島）	⑤薬師堂（上小口）	
臨 済 宗	⑥妙徳寺（中小口）、⑦徳林寺（余野）、⑧全徳寺（余野）	⑨観音堂（余野）、⑩妙智寺（河北）	⑮大師寺（下小口竹田）
浄土真宗	⑪本光寺（外坪）、⑫教善寺（外坪）		
浄 土 宗		⑬釈迦堂(秋田替地)	⑯阿弥陀堂（下小口）、⑰放光寺（下小口寺田）
真 言 宗		⑭薬師堂〔陽学院〕（下小口下島）	

3-3-38　寺院位置図

一　桂林寺（けいりんじ）

宗派	開基年代	所在地
曹洞宗	一四八四	堀尾跡二丁目一六番地

◆**開基**　僧桂林

◆**本尊**　聖観世音菩薩（ぼさつ）

◆**由緒**

一四八四（文明十六）年三月、越前国南條郡高瀬村（現福井県武生市）宝円寺三世・桂林祖香和尚が創立したもので、最初は大光山長楽寺と称し、現在の奈良子一丁目と御供所一丁目の境あたり（旧豊田字長楽寺）にあったと考えられる。その後廃寺になったが、正保年間（一六四四～四八年）に龍嶽和尚が現在地に再建して大香山桂林寺と改称した。境内にはこの地の出身である戦国武将、堀尾吉晴（ほりおよしはる）と、金助とその母の供養塔がある。

『大口村誌』には一五六九（永禄十二）年、兵火のために長楽寺の殿堂を焼失し、一六二四（寛永元）年中に龍嶽和尚が現在地に再建して大香山桂林寺と改称したと記されている。

◆**その他**

二〇〇一（平成十三）年から二〇〇三年にかけて、建物を大改修し、さらに敷地面積を広げて境内を整備した。二〇〇三年十一月、落慶法要と晋山式（しんざんしき）をおこなった。

3-3-39　桂林寺（2022年撮影）

3-3-40　桂林寺（1935年頃『大口村誌』）

3-3-41　供養塔（2020年撮影）
（左：堀尾吉晴、右：金助とその母）

二　地蔵寺（秋葉三尺坊）

宗派	開基年代	所在地
曹洞宗	享保年間	奈良子二丁目二二八番地

◆開基　桂林寺五世　堅戚舜豊

◆本尊　地蔵菩薩、秋葉三尺坊大権現

◆由緒

桂林寺五世　堅戚舜豊和尚が享保年間（一七一六～三六年）に地蔵堂を兼務したのが始まりで、以後、桂林寺住職が代々兼務した。

江戸時代中期、地元の庄屋であった社本伴左エ門が武家屋敷から秋葉様のご神体をもらい受けることになり、地蔵堂に安置したのが「御供所の秋葉さま」の始まりと伝えられている。

旧暦の正月初丑の日と二十八日は大祭日にあたり、かつて参拝者は、くど（かまど）の灰を持参し、線香の灰をもらって帰った。家に着くと、その灰をくどにまいて火難除けとした。毎月二十八日は縁日で、境内及びその周辺には露天商や見世物小屋が立ち並び、一九六〇年代までは近隣集落からの参拝者で賑わった（第三編第四章第二節）。

一九九六年六月五日、不審火により総本殿が焼失したが、一九九八年十月に再建され落慶法要が営まれた。

3-3-42　総本殿（1935年頃『大口村誌』）

3-3-43　総本殿（2020年撮影）

三　長松寺（ちょうしょうじ）

宗派	開基年代	所在地
曹洞宗	一六九四	大屋敷三丁目一九六番地

◆**開基**　僧伝東

◆**本尊**　鋳鉄地蔵菩薩立像

◆**由緒**

一六九四（元禄七）年、諸国巡行の僧伝東が、村人の願いにより、中島郡奥田村（現稲沢市）にあった長松寺を大屋敷村に移したのが、この寺の始まりとされている。また、一七三一（享保十六）年には、僧皓受が境内に地蔵堂を建立したと伝えられている。

寺伝によれば、寺宝であった薬師如来立像は、丈三尺（約九〇cm）、天然木で聖徳太子作、弘法大師開眼といわれ、寺院の西を流れる幼川（現五条川）を流れてきたものを祀（まつ）ったものであるという。

一九九五年十二月十五日、不審火により本堂と薬師如来立像を焼失した。また、愛知県指定文化財であった鋳鉄地蔵菩薩立像（第三編第六章第一節）も被災したが、檀家による負担と県・町からの補助により修復された。本堂も、一九九八年四月に再建され落慶法要が営まれた。

◆**伝承**　汗かき地蔵

小平治弘法

（第三編第四章第三節）

3-3-44　長松寺本堂（1935年頃『大口村誌』）

3-3-45　長松寺本堂（2022年撮影）

四　円応寺（えんおうじ）

宗派	開基年代	所在地
曹洞宗	一七五五	萩島一丁目一三三番地一

◆**開基**　円応祥徳居士

◆**本尊**　釈迦（しゃか）如来

◆**由緒**

この寺は、元来熱田（現名古屋市熱田区）にあって留心寺と称していたが、惠閑尼の宿願で一七五五（宝暦七）年にこの地へ移した。翌年大口村の住人、田山地九右衛門（たやまちくえもん）が父の供養のために寺を建立し、檜岩山円応寺と改号した。

3-3-46　円応寺（2022年撮影）

五　薬師寺（やくしじ）

宗派	開基年代	所在地
曹洞宗	一五八三	上小口一丁目三三五番地

◆**開山**　木村良源

◆**本尊**　薬師如来

◆**由緒**

『大口村誌』には「由緒は明らかでないが、明治初年までは田福山福生寺と称し、上小口の白山社の境内にあったが、その後現地にうつし、寺号を薬師堂と改めた」とあるが、一八四一（天保十二）年の小口村の村絵図には、白山社の西隣に薬師堂と書かれている。

『尾張徇行記（じゅんこう）』には、一七九四（寛政六）年に「三四〇年ほど経っているが年暦は不詳」という記述があるため、これによれば一四〇〇年代中頃にあたる室町時代の創建となる。

また、当初丹羽郡役所が作成し、郡役所廃止後は大口村が作成した『寺院仏堂明細帳』には、「創立 天正十一年、明治十二年十二月一日存置許可」と記載されている。

一九三九（昭和十四）年に宗教団体法が施行され、一九四二年に登録申請をした際、薬師堂から薬師寺として認可された。

堂内には、銅造千体地蔵（愛知県指定文化財（第三編第六章第一節））・薬師如来坐像・聖観音坐像・釈迦如来立像（いずれも町指定文化財（第三編第六章第二節））がある。ほかにも仏像が安置されており、それらの中には開基年代よりも古いと考えられるものもある。一九九〇年代に無住となり、以後、地域住民によって維持管理されている。

境内入り口の石柱正面には「萬町薬師如来」とあり、その上部に「臨済宗」とあるが、『寺院仏堂明細帳』では、曹洞宗となっている。石柱の右面には「霊覚山 薬師寺」、左面には「昭和十四年十二月吉旦」とある。

3-3-47　薬師寺（2020年撮影）

六　妙徳寺（みょうとくじ）

宗派	開基年代	所在地
臨済宗	一四七五	中小口一丁目三七七番地

◆**開基**　織田遠江守広近

◆**本尊**　薬師如来

◆**由緒**

小口城主織田遠江守広近（おだとおとうみのかみひろちか）が一四七五年に出家し、隠居所を万好軒（ばんこうけん）と改号した。一四九二（明応元）年、織田伊勢守敏定（おだいせのかみとしさだ）が広近の遺命をうけ吉祥山妙徳寺を創建したと伝えられている。

本尊の薬師如来は、聖徳太子（しょうとくたいし）作といわれる木座像（約二一cm）で、雷除けの薬師とも伝えられている。本堂は、一五四四（天文十三）年に建立したが、一八九一（明治二十四）年の濃尾大地震により倒潰し、その後再建され今日に至る。

庫裏は、広近の隠居所である万好軒が度重なる改修・改築を受けたものと伝えられている。

3-3-48　山門（1935年頃『大口村誌』）

3-3-49　妙徳寺（2021年撮影）

3-3-50　本堂・書院（2021年撮影）

七　徳林寺（とくりんじ）

宗派	開基年代	所在地
臨済宗	一四六九	余野二丁目二〇一番地

◆**開基**　織田遠江守広近

◆**本尊**　聖観世音ほか

◆**由緒**

寺伝によると、徳林寺の前身として、一二九四（永仁二）年、余野村在住の武士小池与八郎貞宗（こいけよはちろうさだむね）が、亡き母の供養のため寺院を建立したといわれている。『寺院仏堂明細帳』には、一二九四年、北面の武士小池民部貞利（こいけみんぶさだとし）の創建とも記されている。この寺院は空母山徳蓮寺と称し、宗派は真言宗であった。徳蓮寺は一時衰退していたが、一四六九年、小口城主の織田遠江守広近（おだとおとうみのかみひろちか）が臨済宗の寺院、大龍山徳林寺と改称して再興した。広近は、塔頭の龍福庵・全徳庵・宝光院・徳重庵の四か寺をあわせ、自ら師事する臨済宗の高僧、悟渓宗頓（ごけい）禅師を開山として招いた。悟渓禅師は弟子の壽嶽宗彭禅師に徳林寺を継承させ、自らは美濃の瑞龍寺に住院した。

一五八四（天正十二）年、小牧・長久手の戦いにおいて、古方丈と中門を残し焼失したが、その後に再建され、幕末から明治期に作成された『尾張名所図会』にも禅宗の修行道場であったと記されている。

◆**伝承**　山姥物語

（第三編第四章第三節）

◆**その他**

徳林寺山門・中門

（町指定文化財

（第三編第六章第二節））

3-3-51　山門（1935年頃『大口村誌』）

3-3-52　山門（2022年撮影）

3-3-53　中門（2022年撮影）

八　全徳寺

宗派	開基年代	所在地
臨済宗	一四七五	余野二丁目二〇五番地

◆**開基**　海甫和尚

◆**本尊**　聖観世音

◆**由緒**

寺伝によると、一二九四年、山姥を退治した福富新蔵により徳林寺の塔頭寺院の一つである全徳坊として建立された。一四七五年、徳林寺開山壽嶽和尚により全徳庵と改称される。一五八四年の小牧・長久手の戦いで焼失したが、一五九八（慶長三）年、海甫和尚によって再建された。一九〇一年、大休和尚（十世）により全徳寺と改称し、徳林寺を離れ本山の直末となる。『尾張徇行記』には、草創年暦は不明で、中興再建は一六一五（元和元）年とある。

また、『寺院仏堂明細帳』には、一二九七年に丹羽郡羽黒村の郷士、福富太良輔が全徳坊として建立し、一四六九年に徳林寺二世壽嶽和尚により全徳庵と改称され、そ

の後の経緯は、寺伝と同じ内容が書かれている。

◆建設・改修

一九八九年、文雄和尚（十二世）により、本堂・庫裏・山門・東司が再建され、二〇〇二年に鐘楼、二〇〇六年には、書院と茶室も再建した。

3-3-54　山門（1935年頃『大口村誌』）

3-3-55　山門（2021年撮影）

九　観音堂（かんのんどう）

宗派	開基年代	所在地
臨済宗	一六〇〇	余野一丁目一七四番地

◆開基　不詳

◆本尊　観世音菩薩

◆由緒

『寺院仏堂明細帳』によると、一六〇〇年、徳林寺僧継山和尚により創立し、一六七七（延宝五）年六月に再建した。一八九一年の濃尾大地震で建物が倒壊したため建て直したが、平成に入ると無住となり、敷地を整理した。六世住職の貫道祖了尼が喘息（ぜんそく）に苦しみ、石橋山宝寿寺・佐奈田霊社（現神奈川県小田原市）に参詣すると全快したことから、同病者のために再度参詣して御分霊を願い出たところ許された。以来、観音堂は喘息・百日咳などの病状に霊験ありと参詣者が増えたという。

3-3-56　堂内（2021年撮影）

余一様のアメ

無住になって以後も、観音堂の役員が三月二十三日に「余一様のお札とアメ」を観音堂の檀家に配る。子どもにとって、今も昔もこのアメが楽しみになっている。

余一様とは、佐奈田余一義忠という平安末期の武将で、現在の神奈川県平塚市真田を本拠としていた。余一は通り名（通称名）で、真田与一とも書かれる。一一八〇（治承四）年八月二十三日の夜、源頼朝の挙兵に際し、初戦の石橋山の戦い（現神奈川県小田原市石橋）で頼朝に加担したが、頼朝は大敗して、余一は命を落とした。

余一が討死した場所には「与一塚」が建てられ、余一を神霊とする佐奈田霊社が建立された。余一は、「敵将と戦っていた最中にタンがからんで声が出ず、闇夜の中で居場所を味方に知らせることができなかった。それが原因で討ち取られてしまった」という伝説から、佐奈田霊社では、「佐奈田飴」が売られ、咳・喘息にご利益があるとされている。

『大口村誌』には、観音堂に佐奈田余一の軸があり、喘息に霊験があるため遠方から来る人が多いと書かれている。

3-3-57
余一様のお札

一〇　妙智寺

宗派	開基年代	所在地
臨済宗	一七九四	河北二丁目一六番地

◆**開山**　研宗真和尚

◆**本尊**　土面観世音

◆**由緒**

寺伝によると、扶桑村斉藤より、仙田藤右エ門という人物がキリシタンの弾圧をのがれ河北の地へ移り、ここに居をかまえた。その後、藤右エ門は挙母川（現豊田市地内）の川普請に出たがこれに失敗し客死したということで、この霊をとむらうため、扶桑村高雄覚王寺住職に請い創立したとあり、覚王寺の受持である。

創立後は「観音堂」と称していたが、一九四二年に寺院の認可申請をした際に「観音山妙智寺」と改めた。

『尾張徇行記』には、一七九四年、二ノ宮村常福寺控（現犬山市北大門地内）の薬師堂号を譲りうけ、堂を創建し観音を安置したとある。また、『寺院仏堂明細帳』には「創立寛政九年二月五日　覚王寺受持　臨済宗妙心寺派

観音堂」と記されている。

平成に入り、しばらくして無住となる。建物の老朽化により、本堂は二〇一八年に解体した。その際に本堂屋根裏から棟札が発見され、本堂の建立は一七九七年ということが判明した。本堂解体後は、山門と弘法堂が残されている。

妙智寺は、一八七七年頃から「河北（こぎた）学校」として児童の教育の場となり、富成村小学校開校後は農繁期に幼児を預かる場となり、戦後まで続いた。

3-3-58　山門（2022年撮影）

3-3-59　弘法堂（2022年撮影）

一一　本光寺（ほんこうじ）

宗派	開基年代	所在地
浄土真宗	一六六九	外坪五丁目一七三番地一

◆**開基**　不詳

◆**本尊**　阿弥陀如来

◆**由緒**

浄土真宗大谷派の寺院で、一六六九（寛文九）年に僧善昌の開基による。元は外坪本郷にあったが、一六九〇年に新田（現所在地）に移った。

創立は天正年間（一五七三～九一年）とする記述もある。

また、当初は天台宗であったこと、浄土真宗の開基は諦信法師で一八三一年火災により宝物を焼失したとの記述もある。

3-3-60　本堂（2022年撮影）

一二　教善寺（きょうぜんじ）

宗派	開基年代	所在地
浄土真宗	一九五四	外坪三丁目一番地

◆**開基**　平子左エ門

◆**開山**　見真大師

◆**本尊**　阿弥陀如来

◆**由緒**

開基年代は不明だが、一九〇一年まで外坪本郷に説教所があり、同年現在地に移した。

寺伝によると、説教所は名古屋市内にある浄土真宗大谷派の教順寺から僧侶を招き、定期的に説教がおこなわれていたが、一宮市内にある同派の寺院から僧侶を招き住職とした。一九五四年、寺号「宮西山教善寺」として寺院となった。一九七二年、大谷派から本願寺派に宗旨替えした。

一九九九（平成十一）年、本堂を建て替えた。

3-3-61　教善寺（2022年撮影）

一三　釈迦堂（しゃかどう）（弘法堂（こうぼうどう））

宗派	開基年代	所在地
浄土宗	一八三六	替地二丁目三〇二番地

◆**開基**　泰誉安窓貞穏法尼

◆**本尊**　釈迦（石像）

◆**由緒**

伝承によると一八三六年、替地全戸の寺として創立した。集落内に住む人々の宗派は、禅宗・浄土真宗の二派が多かったため、集落内の混乱を避けようと、両者に関係のない浄土宗としたといわれている。本尊は、初め屋外にあったが、のちに堂を建てて祀ったとされる。二〇二三（令和五）年現在、弘法堂と呼ばれている。

3-3-62　釈迦堂（2022年撮影）

3-3-63　釈迦堂内部（2022年撮影）

一四　薬師堂（陽学院）

宗派	開基年代	所在地
真言宗	不詳	竹田一丁目一八四番地

◆**開基・開山**　陽学院實空（伝承）

◆**本尊**　薬師如来

◆**由緒**

四・八m×二・七mの本堂と、一〇・八m×五・四mの庫裏があり、三宝院の末寺で、真言宗智山派密厳院出張説教所であった。

いつから無住になったのかは不明だが、数十体の仏像と座敷からなる本堂を地元住民が守っている。

3-3-64　本堂（2020年撮影）

3-3-65　石造物群（2020年撮影）

一五　大師寺（現存せず）

宗派	開基年代	所在地
臨済宗	一八一二	竹田三丁目地内

◆**開基**　不詳

◆**本尊**　十二面観世音

◆**由緒**

『大口村誌』によると、一八七七年乙第十号御達によって、最寄りの寺院へ転合すべきとされたが、臨済宗妙徳寺住職尾関亮道を受持とし、信徒による寄付で本堂などを建設した。一八八三年五月、寺院として公称する願いを提出し、同年六月十四日公称許可が下りた。また、境内地に仏堂とコンクリート製の弘法大師像もあったとも記されており、二〇一〇年代までは存在した。

二〇二〇年の時点で境内の建造物群がなくなっていた。

一六　阿弥陀堂（現存せず）

宗派	開基年代	所在地
浄土宗	不詳	下小口七丁目地内

◆**開基**　不詳

◆**本尊**　不詳

◆**由緒**

『大口村誌』によると、専修院（扶桑町柏森）受持で、地元住人の先祖代々の菩提を弔うために建立された。

一九三八年に発行された『大口村土地宝典』に阿弥陀堂の記載がある。一九六〇年代まで住職がいたようである。

一七　放光寺（現存せず）

宗派	開基年代	所在地
浄土宗	不詳	下小口五丁目地内

◆**開基**　不詳

◆**本尊**　阿弥陀如来

◆**由緒**

創立は不詳であるが、『寺院仏堂明細帳』によると、一九〇一年、東京市本所区太平町一丁目にあった良徳院が、小口村の浄土宗放光庵に移り県の許可を得て放光寺となった。一九四〇年、県の許可を得て瀬戸市へ移転した。

◆**伝承**

江戸時代後期の念仏行者で槍ヶ岳を開山した播隆上人（一七八六～一八四〇年）が放光庵に逗留した際、井戸の水が濁って困っていた様子を見て、「南無阿弥陀仏」と紙に書き井戸に投げ入れると、たちまち澄み切った水が湧き出るようになったという伝承がある。この地で生まれた人が播隆上人に師事し、出家後は隆盤と名乗り、播隆上人が一八三〇年に開いた一心寺（岐阜県揖斐郡揖斐川町）の二世住職になった。その隆盤が放光庵を創立したとされている。

播隆上人にまつわる伝承は町内のみならず、尾張北部一帯に残っており、それは播隆上人が各地を巡った足跡とも考えられ、放光庵へ逗留したという逸話も全く見当外れではない。その証拠として、独特の書体による名号（南無阿弥陀仏）の軸・石碑が各地に残っており、町内には石碑が地蔵寺と徳林寺に所在する。